事務部長

The Osaka University Library Bulletin

大阪大学図書館報

Vol.5 No.1 Jan. 1971

1. 大学図書館の使命……附属図書館長　関　集三
2. 機械化を中心とした
　大学図書館の未来像……附属図書館閲覧課長　田保橋　彬

大学図書館の使命

関　集三

Ⅰ　情報化社会における大学図書館

1970年代を迎え，われわれは人類の歴史における農業時代，工業時代を経て，その成果の上に立つ情報化時代にはいったといわれている。このことの意味は，人類がこれまで生存するために，自然が育んだ生物を利用し，さらに自然界に存在する鉱物資源を人類に役立たせるような工業を発達させてきた文化が，もはやバラバラの状況に放置されていることが許されなくなり，ここに人間が知的生産によって見出した新しい因子としての情報が新しい文化の発展に必須のものとなってきたということである。したがって，この情報をわれわれ一人一人が受け入れ，それを自己内で再組織化する行為，すなわち学習行為を終生行なわなければならない，いわゆる生涯教育の時代にはいったともいわれる所以である。

このような時代にあって，情報の中でも言語について過去からもっとも中心的な位置をしめてきた文字による情報蓄積である図書をとりあつかってきた図書館の重要性は，いっそう切実に認識されねばならず，特に，研究と教育の場に直結した大学図書館において，このような時代の要請にこたえるため一つの転機に立っているともいえるであろう。

Ⅱ　大学における図書館

上述したような社会の変化の中にあって，特に大学という場にある大学図書館の使命はどうであろうか。およそ，図書館そのものは，情報の蓄積という「入力的機能」とそれを整理再組織して利用者に進んで提供するという「出力的機能(すなわちサーヴィス)」をもつものであることは時代の変化にかかわらず基本的な性格としてもたれるべきものであろう。そして大学内における図書館としては，大学が本来「知識の創造のための研究」と，「獲得された知識の継承と人間形成のための教育」の場であることから，この両目的に対して図書館が積極的に奉仕すべきものである。大学はこの二つの目的を遂行するための教官，研究者とその教育をうける

多数の学生，これらの日常活動を適確にしかも有効に行なうための事務官からなる人間集団としての一つの目的社会である。しかし，大学における研究および教育の高度化につれて，その組織としての各学部の他に種々の附置研究所，附属病院等が設置され，他方においては，サービスセンターとしての附属図書館が設置されて来た。すなわち最近における大学の機能の多様化のため，教育および研究に密着したさまざまの新しいサービスセンターが置かれるようになった。分析化学センター，計算機センター，医療検査センター，工作センター，資料センター，語学センター，もろもろのサービス機関がそれである。すなわち，われわれは情報化時代においては研究（Researh），開発（Development），（R&D）に加えて奉仕（Service）があって初めてその成果が期待されるR，D&Sの時代に入ったといわれる。図書館はこれらのサービスセンターと広い意味で同一の範疇に属し，しかも最も古くから，大学の各部局の最も広範囲にわたるサービス機関であるといえよう。

さて，このようなさまざまなサービス・センター員は周知のように事務官と教官の中間的存在として，しかも教育と研究に対するより直接的なサービスを行なう専門家集団として登場したものであり，このようなスペシァリストとしての地位は，欧米の諸大学ではすでに確立されているといえよう。そのようなサービスセンターの一つとしての図書館の専門職員の役割りは，上述した情報化時代において特に重要な責務を負わされているといわねばならない。今日の図書館は単に蔵書の保管，整理のみならず，激増するさまざまの型式の情報資料に対処して，ドキュメンテーションセンターとしての役割りを多かれ少なかれ，おそかれ早かれ負わされる運命にあるとすれば，図書館員のその専門職としての自覚とその役割りはいよいよ大きいものとなってきている。

Ⅲ　大学図書館の進化（evolution）

一昨年来の大学紛争を契機として大学改革が現時点での急務として捉えられ，各大学その他の機関において幾多の改革試案が提案されているが，研究と教育に密着した図書館の改革についてはふれられるところが甚だ少なく，例えば中教審答申をみても，わずか一行足らずふれられているにすぎない。しかしその重要性についてはようやく認識がふかまりつつあり，例えば国立大学協会は本年6月「大学の研究・教育に対する図書館の在り方とその改革について」と題する第一次報告を出すにいたった。そこでは，大学図書館の改革についてのきわめて有益なさまざまの示唆と問題提起が行なわれているが，ここではそれに直接ふれることはひかえ，大学図書館の性格の進化について簡単にふれておきたい。

いうまでもなく，戦後の大学図書館は上述したように，単なる入力的，受働的立場から，出力的積極的サービス機関としてその機能の転換をめざしている。すなわち入力を充分大きくするとともにそれを整理，調整して充分な出力をもたすためには，図書館がたえず外界に接触して初めて行ないうるのであり，このような動的性格をもつためには生物がそうであるように必然的に開放的性格を必要とすることになろう。図書館員はそのためのみずからの精神的エネルギーを充分身につけると共に，入力を出力化するためのさまざまの資材の機械化と共にそのサービスの迅速化の設備とそのための研修をせまられている。すなわちこれまでのいわば静的な性格の衣を脱ぎ，新しい動的な生き生きとしたスペシァリストの集団となるためには，単なる従来の量的延長でない質的変化をせまられてきているのである。言葉を換えれば今日の図書館には単なる延長上の成長ではなくて脱皮を伴う進化（evolution）が要請されているということができるのではあるまいか。

Ⅳ 大学における研究・教育に密着した図書館

前節で述べた大学図書館の進化を行なうにあたっては，図書館が，大学で独走すべきものではなく，あくまでも過去の歴史を背負ったそれぞれの大学の特殊性とその改革方針に準じて即ち，それぞれの大学の固有の研究と教育の改革に密着して，その大学固有の進化を行なう必要がある。そうでなければ，図書館は大学から遊離してその本来の生命を失うにいたるであろう。そのためには，図書館がたえず，大学の機構の変化，研究および教育体制の改革に注目し，それに密着して，しかも図書館固有の使命にのっとって進化して行かねばならない。そこで，このような立場から，教育にむすびついた学習図書館的機能と研究図書館的性格にわけて以下その関係を若干考えてみよう。

まず学習図書館について考えてみるに，戦後，新制大学が発足した当初より既に，その一般教育と専門教育の相補的役割りを果たし，単位制の採用の基盤となる自主的学習の場としての図書館の必要が重要視され，大学基準協会（1947）の発足，大学図書館基準の決定(1952,1956)が行なわれ，多くの改善要項，学術会議や，国大協の勧告がなされたにもかかわらず教育における図書館の役割りは軽視されたままに今日にいたっているといえよう。これは，新制大学の発足が旧制大学と旧制高校の単なる接合のままで行なわれ，民主教育の教育理念が充分に生かされなかったためである。ところがアメリカにおいては既に，1963年1月29日故ケネディ大統領は議会メッセージにおいて「現在の諸大学の傾向をみると，講義が次第に少なくなり，学生自身の自主的学習が多くなっている。その結果，大学図書館はいままでよりはさらにいっそうアメリカの大学生の学生生活にとって本質的な重要性をもつものとなっている」と指摘している。

わが国では，図書館の不備もあろうが，新制大学制立当初の矛盾にいっそう拍車をかけるように逆に過密カリキュラムがくまれ，また一般教育と専門教育の分離が行なわれて，そのために教育改革は形式的にのみ終わり今日にいたった。しかし最近の大学紛争を通じて，この欠点が強く反省され，一般教育と専門教育との四年乃至六年を通してのいわゆる一貫的教育の必要性が再認識されるようになって来ている。これに対応して，図書館側の立場としては，指定図書制のわが国の教育計画に則した定着，参考業務の充実，教養的図書の補強により自主的学習を促進し，教室における講義の2倍の図書館利用による自習をなさしめ，講義におりこまれたreading report, reading list, great book series 法の活用等をはじめ開架図書にもとづくbrowsing，ゼミナー室，充実した複写設備，音楽教育設備，LL室，展示活動，夜間開館等の幾多の改良すべき問題が山積している。これらは単に図書館側の努力のみによって行なうことは不可能であり図書館職員を中核とし，図書委員会とカリキュラム委員会その他合同の大学の改革方針とむすびついた計画のもとに初めて行なうことができるものである。これにより，図書館員と教職員と学生の三者が密接に関連づけられ，大学の講義は「学生が自分で発見しうるものは教えない」立場のものとなり，学習図書館は教育に密着した活動を行うことになろう。特に一般教育振興のためには全学的な開架図書の活用が望ましいことはいうまでもないことであり，学生は図書館で，学問分野ごとに見事に配列された図書に接して一般教育と専門教育の有機的統一を視覚を通じてみずから体得しうるようになる。なお，一貫教育の立場からこれまで各学部図書室に欠け勝ちであった学習図書館的性格の補強と配慮がますます重要となろう。

以上のべたような改革に対しては，これまでの受動的立場からより能動的な立場にたち図書館職員が，積極的に学生の図書館利用のためのオリエンテーションまたは講義に参画し，あるいは図書館学に必要な単位の講義に積極的に乗り出すことも考えられ，場合によっては，図書館専門職員が図書委員会に専門委員として現在よりもより積極的に参加しうる制度にすること

も考えられよう。

次に研究図書館の役割りについてその進化の方向を探ってみよう。すでに上述したように図書以外の学術雑誌，学会報告，統計資料，公共出版物，政党刊行物，各種新聞，プレプリント，レビュー，ニュースレター，パンフレット，会議レポート，モノグラフ，学位論文等，多種多様の情報が急速に増大し，それに用いられる外国語もいよいよ多種類になってきている。その情報蓄積の方式も従来の書籍以外に，マイクロフィルム，マイクロフィシュ，磁気テープ，ビデオテープ，音盤，スライド等のさまざまのものに拡大され，またその図書館側の研究に対するサービスの迅速化のためのテレタイプ，図書館間連絡テレビ，電子計算機，その他システム化が必須のものとなりつつある。これにともない，国内はもとより国外における情報網の確立と，それぞれの大学の特殊性に応じた図書館分館乃至分室の専門図書館的変容とそれぞれの学界でのネットワークの参加がすすめられ，それに伴い図書館における参考業務は，これに対処するためいよいよ専門家的要素を要求されるとともに，近い将来情報過度に対処し精度の高い情報と誤った情報との区別，即ち，情報公害をなくして整理されたすぐれた情報を研究者に提供しうるように研究者と協力するよう心がけねばならなくなると考えられる。このようにして大学図書館は大学における情報センターとしての性格をますます強く荷うことであろう。一方，大学の中央館は，多角化，専門分化する分館または分室の全体の綜合的管理運営の中心としての役割りおよび全学の学習図書館的性格の保持と配慮を行なう役割りがいっそう重くなると共に，大学によっては，大学そのものの管理・運営に関する情報の提供をも兼ね行なうこととなろう。

V 結　語

前世紀のイギリスの著名な文明評論家，トーマス・カーライルは"True university of these days is a collection of books"という言葉をもって大学図書館が大学の心臓であることを強調した。そして立地的にも大学図書館は大学構成員を引きよせるためキャンパスの中心におかれるようになった。今日の図書館は，建物的にも，内部施設においても，多種多様の情報資料の処理においても，さらには，もっとも重要な図書館職員のスペシァリストとしての素質とその処遇においても，過去における不備の改善と未来のあるべき姿の間にはさまれながら大学の研究と教育に奉仕しようとしているのである。このためには従来の静的，受動的立場から上昇して図書館の情報科学的接近を計りながら，動的積極的立場に前進しなければならない。

即ち，学内においては教育計画にいっそう密着するよう教官やその組織に接近し，教育方法に対する助言を行ない，場合によっては図書館利用のための教育を分担し，また研究者と協力しその学術文献センター的役割りを果たすとともに，学外においては図書館相互の協力とそのための全国的または国際的ネットワークを強化して，開かれた大学に適応した多面的綜合的な進化が要請されているということができる。

（附属図書館長）

機械化を中心とした大学図書館の未来像

田保橋　彬

1. 序　説

大学図書館の現状は，図書館資料（学術情報）の激増，研究分野の交錯化，細分化ならびに利用者の急増と多岐にわたる要求に対して，いまだに前近代的な手工業的業務処理を脱却せず，加えて職員の増加がきわめて困難なため，業務の大巾な遅滞を生じ，図書館資料を円滑に利用者に提供できない状態にある。このため，研究・教育に及ぼす影響は大なるものがあり，強く大学図書館の管理運営の改善が要望されているところである。この点にかんがみ，日本学術会議はすでに昭和39年に「大学図書館の近代化について」政府に勧告を行なったが，このなかで，「学術情報組織の形成と全国協力」ならびに「情報科学の振興と専門職制の確立」を強く要望している。これは，とりもなおさず，大学図書館の機械化を前提とした構想といえよう。この勧告は政府に対して行なわれ，もちろん文部省が，大学図書館近代化の基本構想を立案し，人員，予算の面をじゆうぶんに勘案して実施に移さねばならない性格のものであるが，ひるがえって，大学図書館側として，この勧告に盛られた諸要綱をいかにして具体化するかという真剣な検討が行なわれ，かつ，可能な面からでも実施に移そうとした努力がなされたかどうかという点では，反省しなければならないことが多々あると思われる。

大学図書館の使命を改めて，ここで論じるつもりはないが，従来の理念においてすら，これを達成するについてはいささか現実的に腰が重かったのは事実であろう。大学改革の波が激しくうちよせようとしている今日以降において，大学が学内外に広く門戸を開くことが社会的にも要請されているのに対応して，大学図書館も学部，学科に閉じこもることなく，学内はもとより，学外にも，また海外にも広くそのカウンターを開かねばならない。

当面の急務としては，業務を機械化し，情報化社会における図書館資料（学術情報）の激増と利用者の急増とに対応して，教育・研究上必要とするものを迅速かつ的確に利用者に積極的に提供する態勢を確立し，管理運営の改善を図るとともに，全国的・地域的な学術情報組織を形成することである。

これらを具体化するにあたって，一挙に実施するには，多くの解決すべき問題点があるので，中期的展望（5か年）および長期的展望（10か年）とに大別して考える必要があろう。中期的展望においては，大学図書館業務の電算機による省力化を推進するとともに，来たるべき学術情報組織の形成の基盤作りを行ない，長期的展望においては，地域的・全国的学術情報組織の形成と他の科学技術関係組織との連結，海外学術情報組織との連けいを図らねばならない。

また，大学図書館の有する機能を教育面と研究面に大別して考える必要がある。教育面については，大学教育の改革と対応して考慮すべき側面が少なくないが，大学教育の改革は教育方法の改善を伴い，当然 CAI (Computer Aided Instruction) が大巾にとり入れられることが予測されるので，大学図書館は，スライド，オーバーヘッドプロジェクターの資料，VTR の作成，あるいはプログラムテープの作成等を分担するであろうことが考えられる。研究面においては，大学改革の如何にかかわらず，学術情報およびデータの流通過程に，部局，大学の壁は考慮に払うべきではなく，当然，専門分野を主体に考えるべきであるので比較的展望しやすいといえる。

2. 機械化のための前提条件

(1) 組織の整備・改組

現在の大学図書館の組織は，ややともすれば各部局，各学科に分散した施設を有し，かつ，それぞれ独立図書館のように一貫業務を行なっている。これは人員のみ多く要し，図書館職員1人あたりの生産性を著しく低下させ，サービス密度をうすくさせている要因の一つである。機械化を推進するにあたっては，可能なかぎり，機械化すべき業務を集中化しなければその意味がないので，図書施設を大巾に集約する必要がある。この場合，部局，学科の枠にとらわれることなく，専門分野での集約化が，可能なかぎり大きな単位でなされるべきであろう。これは，学術情報量の生産が飛躍的に増加するため，1部局，1学科の枠では，必要とするものを網羅的に収集することが不可能となってくるので，後述する情報組織と同様の共同収集・加工共同利用の原則に立脚せねばならないからである。

(2) 業務の合理化・システム化の推進

業務の省力化・機械化が将来の学術情報組織の基盤ともなるべきものである。従来の大学図書館業務は，各個業を独立化させ，職人的技術に依存している割合が甚だ大きかったが，まず，業務の分析を行ない，流れを再検討し，全体としてシステム化を行なわねばならない。

業務の合理化の本質は人間でなければ処理できないもの以外は，機械的な処理を行なうとともに，無駄な重複作業を行なわないことにあるのであるから，本来の本質的な意味を失った作業等は排除する必要がある。

(3) 業務の標準化の推進

中期展望における業務の省力化においても，さらには，情報検索を主とする長期的展望の学術情報組織の形成にあたっても，あらゆる面で標準化が必要であり，これがなければ，情報ファイルの両立性および互換性が成立せず，いたずらに隔絶した小都市国家を形成することになり連邦国としての機能を果たさなくなってくる。

(4) 図書館職員の意識の変革

図書館職員は，従来ややともすれば，業務のうち，整理作業を重視し，そのルール等についても独善的になりがちで，共同作業には積極的ではなかった。今後，大学図書館の機械化の進行によって，各図書館職員の恣意的なルール選択は許されなくなり，好むと好まざるとにかかわらず標準化された単一のルールを採用する意識を持たねばならない。

また，図書館職員は，新しい大学図書館の使命をじゆうぶん認識して，利用者へのサービスに重点をおくべきことは言うまでもない。端的にいえば，この使命達成のために，図書館職員はシステム的思考方法をとり，現実的な合理主義に徹し，業務の改善については，過去に遡及するような完璧主義をすて，段階的な改善案をとるべきであって，利用者の要求をじゆうぶん分析して，重点的にこれらを行なうことが肝要である。

(5) 図書館職員の訓練と専門職の養成

図書館職員を電算化の方向にあらゆる機会をとらえて教育しなければならないことは必須の条件である。学内の電算化を利用して，シュミレーションを行なうのも一方法であろう。これらは積極的に，かつ，計画的に相当長期にわたって行なう必要がある。

業務が省力化され，学術情報検索のための学術情報組織が形成されようとも，どうしても人間が行なわなければならない業務が残ってくる。その主なものは，depth indexing といわれる深層主題分析であり，Coding といわれる記号化である。これは，情報の入出力の如何にかかわらず，熟練した専門職員が行なわなければならない。この専門職員は，専門分野について

の深い知識と，検索技術のじゅうぶんな練度および，意志決定能力と企画立案能力を必要とするので，従来の図書館職員よりさらに高度の資質が要求される。これらの専門職員は図書館内において明確な地位と処遇が与えられねばならないし，これの養成機関の整備が望まれる。

3. 中期的展望（前期5か年計画）

(1) 機械化の前提条件の充足

(2) 業務の機械化

中期的展望においては，可能なかぎり大学図書館業務を電算機によって機械化し省力化することを目標とする。この目標の達成については，多くの財政的措置を必要とするが，(1)の条件の充足が必須の要件となってくる。しかしながら，前提条件を一挙に充足することは困難なので，これらの条件をみたしながら，機械化を推進するには限度があると考えられるので，大学図書館の規模，業務の性格，電算機の能力と価格等を勘案した場合に次ぎのことが言える。

(イ) 電算機適用業務

① 図書の発注・支払・受入

② 新着図書速報の作成

③ 閲覧業務（館外貸出・返却・利用統計等）

④ 学術雑誌の受入管理

⑤ 学内総合目録（冊子体）の作成

(ロ) 電算機非適用業務

① 図書の整理（目録・分類・カード目録編成）

これらについては，国立国会図書館の印刷カード（和書）を最大限に利用し，また，46年度以降米国議会図書館の MARC Ⅱフォーマット（Machine Readable Catalog）から，さらには国立国会図書館独自の Japanese MARC（和書のフォーマット）から，国立国会図書館が出力する書誌的データを利用し，各館における整理作業を可能なかぎり軽減する。

② 参考業務

③ コンテンツ・シート・サービス

大容量の記憶装置を必要とするので，この段階では財政的に困難であろう。

④ その他の定性的な業務

(ハ) 電算機の機種

上記の適用業務を各大学図書館の規模を勘案のうえ，PPBS (Planning, Programming and Budgeting System＝科学的財務管理方法）のケーススタディとして，文部省大学学術局情報図書館課が検討した「大学図書館の管理運営の改善について(中間報告)」によれば，ミニコンピューターを主体とした機器構成による電算機システムが，財政的にも効率が高いとされている。これは各大学図書館の規模(年間増加冊数・利用対象者数・学術雑誌種類数)別に主記憶 4K語～8K語の中央演算処理装置に，副記憶として2,560K語～5,120K語の磁気ディスク・パック装置，入出力装置として1～4台のデータタイプライター，規模によっては，ラインプリンターを有する約15,000千円～42,000千円の超小型電算機システム（パンチカードを用いない）である。このシステムの導入によって，手作業に比すると，処理時間においては50%速くなり，経費は80%に減じ，人件費は55%に減ずることがほぼ明らかになってい

るので，中期的展望による大学図書館の業務の省力化はこれによるべきであろう。

(二) 学内の電算機の利用

相当数の大学には，電算機が配置されているが，主として汎用の科学技術用システムで構成され，図書館業務に必要な大容量の記憶装置を欠いている例が多い。また，研究用の計算に追われ，事務用に割り込む余地が少ない例が多いので，事務用の電算機を有する大学以外は，日常業務として，学内の電算機を利用するのは困難であろう。しかしながら，図書館においてパンチカードまたは紙テープ等で入力準備を行ない，電算機のあき時間に一括処理することは可能であると思われるので，充分検討すべき問題であらう。

(3) 学術情報組織の基盤づくり

(2)において，各大学図書館の業務の省力化が推進されるのと並行して，来たるべき学術情報組織の中核となるべき大学図書館を選定し，情報センター館としての基盤を形成させねばならない。すなわち，全国を数ブロックに大別し，そのブロック内の中心的大規模大学図書館をその地区の情報センター館として育成するため，二次資料の計画的な収集，蓄積と，研究情報はもとより，大学の教育，研究に必要な事項について，クリアリング業務を行ないうる体制を形成するよう準備しなければならない。

このほか，たとえばMEDLARS (Medical Literatur Analysis and Retrieval System) の日本導入に伴う専門情報センターのネットワーク形成について推進しなければならないことはいうまでもない。

また，すでに設けられている5文献センターも専門センターとして強化しなければならないことだろう。

さらに，本格的な学術情報組織が形成される準備段階として，各大学図書館を結ぶ連絡網としてテレックス（加入電信）を利用することが急務となりつつある。

4. 長期的展望（後期5か年計画）

後期の5か年計画においては，前期5か年計画での地ならし工作を終え，学術情報組織を基盤とする大学図書館のトータルシステム（全自動化）を目標とし，さらに，大学図書館を中核とする学術情報組織と，他のたとえば科学技術情報組織等との連けいをも考えるべきである。

学術情報組織はブロック別の地区センターを中核にする一般的な学術情報のサブネットワークと，専門分野ごとの文献センター，データセンターを中心とする各サブネットワークから形成され，全国的利用または地域的利用のサービスにあたる部門は，当該大学図書館の組織内におくとしても，全国共同利用施設として，別途に，人事，予算，施設面の配慮をなさねばならない。

また，これらの組織をささえる電算機の機器構成については，TSS 方式の可能な大型の規模に大容量の集団ドラム等記憶装置を必要とするが，財政的見地から，文献センター，データセンター等においては，電子的記憶装置に依存するのみでなく，情報ファイルとして光学的な手段（マイクロフィシュ等）を併用して，記憶量の増大を図るべきであろう。さらにこの期に至れば，電算機の性能向上と反比例して価格も著しく低減することが予測されるし，電気通信法の改正により，データ伝送線の「他人使用」「共同使用」が可能になり，かつ使用料も低減すると考えられるので，大型電算機が情報検索用等として導入されやすくなるであろう。

また，漢字の入出力装置の開発も，この時期に至れば，簡易なものが実現し，日本語で記述された書誌的情報の入出力が容易となろう。

さらに予測すれば，電算機は第4世代に入り，多相大規模集積回路と，現に開発されつつあるが，磁気テープの1万倍磁気ドラム，ディスクの100倍の記憶密度を有する光記憶装置（ホログラム）とを採用した，コンパクトでかつ超大型電算機の性能を有するものが実用化されるので，巨大なデータ・バンクを形成することが可能となろう。

(1) 一般的学術情報ネットワーク

各ブロックの中心的大規模大学図書館に電算機をおき，この地区情報センターは次ぎの業務を行なうものである。

(イ) TSS方式により，ブロック内の各大学図書館に汎用端末装置またはCRTディスプレイ(Cathode ray tube display 映像表示装置）をおき，日常業務を地区センター館の電算機の集団ドラム装置で処理する。

(ロ) 地区情報センター館は，二次情報を磁気テープ等（市販の入力済のもの，たとえばMARCⅡ）の形で蓄積し，端末機器を通じて各大学図書館の情報検索に応ずる。

(ハ) また，教育，研究に関連する情報を独自にまたは，他の地区情報センターと分担して収集し，蓄積し，クリアリング業務または，レフェラル業務を行なう。

(ニ) 学術情報組織のネットワークの形成形態にもよるが，ノン・ダイレクトのデータ網を全国大学にはりめぐらすことは，財政的にロスが多いと考えられるので，地区内各大学図書館とはダイレクトのデータ網で結び，他地区の地区情報センター館あるいは専門情報組織または内外の他の科学技術情報組織との間では，さらにダイレクトのデータ網で結ぶこととなろう。したがって，地区情報センター館は，地区内大学図書館の情報流通のためにこれらの組織とのスイッチングセンターの割合をも果たすこととなろう。

(ホ) 地区情報センター館についても，各地区情報センター館間において，大別した専門分野（たとえば法学，農学等）により，当該大学がより多く，かつ，より密度の高い学術情報を蓄積しているところが，その一次情報を集中的に収集・保存するとともにこれを加工し，二次情報ファイルを作成することを分担すべきであろう。

(ヘ) 大規模大学で，広大なキャンパスを有するところは，極度に縮少した形で，前述の①～④までの業務を学内で行なう必要が生じる。

(2) 専門的学術情報ネットワーク

一般的学術情報ネットワークが，日常業務の処理と二次情報の検索を行なうのに対し，この専門的学術情報ネットワークは，利用者の要求度のとくに高い，狭い専門分野（たとえば経済統計，経営分析，金属材料，地震等）において，二次情報の蓄積・加工はもとより，一次情報源としての文献資料，データ等をデータ・バンクの形で蓄積し，国内外の研究者に対して，検索に応じ，原資料，データを提供するとともに，SDI (Selective Dissemination of Information 選択的情報提供）サービスを行なうものである。この専門情報センターは，その専門分野の文献資料およびデータを評価し得る研究者が所在し，その分野における研究成果が世界的水準にある大学に設置すべきであろう。この場合，専門情報センターは同一大学に複数存在することもあり得るが，巨大な記憶容量を必要とするので，独自に電算機システムを必要とすることもあり得るであろうが，可能なかぎり，地区情報センター館の電算機を使用すべきではなかろうか。

この専門情報センターにかぎらず，一般的学術情報ネットワークにおいても，取り扱う主題は，とくに要求の高い自然科学分野から社会科学分野等へと重点的に行なうことが心要であろう。これの選択には審議会等を設け慎重に検討すべきである。また，各専門情報センターは，国内はもちろんのこと，海外からの情報検索・提供，クリアリング等の要求が多いと考えられ

るので，これらの要求をいかなる接点で処理するかが問題となろう。

(3) 学術情報組織と他の国内外の情報組織との関連

国内的には，国立国会図書館，NIST（National Information System for Science and Technology）の中心となるJICST（日本科学技術情報センター）とのネットワークの接点をどのような形で結び付けるか問題であるが，大学図書館を中核とする学術情報組織が国際的にも標準化された書誌記述およびデータコード等を使用していれば，機械的なコンバージョンの問題があるにしても，比較的容易にデータ伝送線を開設し得るものと考えられる。これは，地区情報センター館および一部の専門情報センターとノン・ダイレクトに結合させる必要がある。

また，国家的な見地から，可能なかぎり二重投資を防ぐ意味で，他の情報組織のサービスを最大限に利用するとともに，他の情報組織に存在しているものと同種の専門情報センターは設置しないという配慮も必要となろう。

さらに国外の情報組織との接点については，学術情報組織と独自に行なうか，または，国家的な機関をスイッチングセンターとして行なうか検討を要するし，UNISIST (World Science Informafion System）との関連をも考慮しなければならない。

また，企業体の研究機関に対するサービスをどのような形で行なうかも問題であり，自然科学系の学術情報と科学技術情報は，先進国においては，同質のものとして取り扱われている例がほとんどであるため，このケースは多くなると考えられる。

5. 結　　び

機械化を中心とした大学図書館の未来像の最終の姿は，学術情報組織の構成要素として，各大学図書館の規模，所蔵資料の性質等ならびに各大学の研究成果を勘案したそれぞれの位置において，みずからの大学図書館の全業務を自動化して，機能するところにある。したがって，各大学図書館は全国共同利用施設としての機能を含みつつ発展していくことを期待するものである。

（大阪大学附属図書館閲覧課長）

〔注〕この一文は、昭和45年10月1日高野山大学において開催された国立大学図書館協議会第17回総会の研究集会（テーマ：新しい大学図書館像）で発表したものである。
同時に発表された〝大学図書館の未来像ーその理念を中心にー〟（北海道大学附属図書館長 今村成和氏)は，北海道大学附属図書館報「楡蔭」4巻特集号45.10に掲載されている。

ワーキング・グループ（建築・機械化）誕生

図書館業務の多様化にともない，従来の縦割りの事務分掌では対処できなくなる場合が予想される。図書館ではこれらの欠陥をカバーするため，特定のプロジェクトについて掛の枠を超えたワーキング・グループを組織する方針であり，このたび図書館増改築，コンピューター導入等に備えて2つのワーキング・グループを発足させた。これでワーキング・グループは既存の教養図書選択グループとあわせて合計3グループになった。部課長・補佐以外の各グループのメンバーは次ぎのとおりである。◉：推進係

教養図書選択グループ

◉浅野（受入掛長）津田（受入掛）茂幾（同）野田（整理第一掛）大野（同）岩井（参考掛長）高木（参考掛）松浦（運用第一掛長）河崎（運用第一掛・基工図書室）

図書館建築グループ

小嶋（総務掛長）榎田（総務掛）津田，尾崎（整理第一掛）高木　◉松浦　藤田（運用第一掛・理学部図書室）

図書館業務機械化グループ

小嶋　◉浅野　津田　茂幾　尾崎　森（整理第一掛）岩井　松浦　篠田（運用第一掛・理学部図書室）河崎　徳村（運用第二掛長・中之島分館事務責任者）田中（運用第三掛長・吹田分館事務責任者）

新設の2グループはそれぞれ次ぎのような第1回会合を持ち具体的作業にはいった。

建築グループ　45.11.25（水）11：30〜0：15 於 本館会議室

機械化グループ　〃 12.16（水） 2：00〜5：00　〃　（今後は毎月第1・3水曜日定例）

美術書・レコードの寄贈

去る12月10日，本館の蔵書にうるおいを持たせるため，教養部教官有志（代表大嶋教授）から本館に美術関係全集13点110冊（SKIRA Art Book，日本版画美術全集など）および，ポピューラーを中心としたレコード28枚が寄贈された。これらの図書は整理次第開架室に出して利用に供し，レコードはコンサートなどの催しを開くことにより，寄附者のご厚意を生かしたい。

71年度外国雑誌予約　完了

例年のとおり本学各部局の外国雑誌予約は，各図書館での予約作業を11月中に終え，各部局から送付されたリストにより受入掛で一括予約手続を完了した。

点数は4,187点，金額は87,491,796円（概算）で，1点当たり平均20,896円になる。この数字は前年に比し，点数で6.1%，金額で7.9%の増加である。

学生希望図書 —本館—

昭和45年12月初旬現在、受入済みのもの

経済理論における数学的方法
(岩波講座 現代応用数学)
岩井琢磨・二階堂副包 岩波書店

Curves and surface for Computer aided design Union of Cambridge
Forest A.R

日本封建制イデオロギー
永田 広志 法政大学出版

価値論研究 山本二三丸 青木書店

孤独の賭け1・2 五味川純平 三一書房

日本化学工業論 近藤 完一 勁草書房

いちご白書 青木日出夫訳 角川書店

微分法(シュバルツ解析学第2巻)
シュバルツ
小島 順訳

青春の蹉跌 石川 達三 新潮社

バーロー物理化学上・下
バーロー、G.M
藤代 亮一 東京化学同人

演奏のよろこび
イエルク・デムス
渡辺 健訳 白水社

物理学の構成
押田 勇雄 培風館

錦鯉 黒木 建夫 講談社

価値形態論と交換過程論
久留間鮫造 岩波書店

知的生産の技術 梅棹 忠夫 〃

ブルバキ数学史 Bourbaki, N 東京図書

物理学古典論文叢書 全12巻
物理学史研究会 東海大出版

流体力学Ⅰ
ランドウ・リフシッツ
竹田 均訳 東京図書

武谷三男著作集 全6巻 勁草書房

教官著作寄贈図書

—本 館—

千原秀昭(理 教授)
化学の論文を英語で書くための化学英語の活用辞典 S45. 化学同人

関悌四郎(医 教授)
集団医学の発足(原点からのレポート)
S45. 現代ジャーナリズム

尾崎 弘(工 教授)
樹下行三(工 助教授)
白川 功(工 講師)
情報回路論(1) (情報工学講座1)
S45. コロナ社

岡田 実(前 総長)
閃光 第二部:夏の雲 5冊
(本館3. 中之島1. 吹田1)

畠中道雄(社研 教授)
統計学(経済学入門叢書6)
S45. 東洋経済新報社

—中之島分館—

関悌四郎(医 教授)
集団医学の発足—原点からのレポート—
S45. 現代ジャーナリズム出版会

熊谷 朗(医 助教授)
ホルモンの分泌調節
S45. 中外医学社
ACTH—基礎と臨床—
S45. 中外医学社

—吹田分館—

尾崎 弘(工 教授)
過度現象論 S45. 共立出版
大学課程電気回路Ⅰ,Ⅱ S44. オーム社
回路網理論 S45. 共立出版
ディジタル計算機の論理設計
S44. 朝倉書店
情報回路論Ⅰ(情報工学講座1)
S45. コロナ社

—理学部図書室—

千原秀昭(理 教授)
化学論文を英語で書くための化学英語の活用辞典 S45. 化学同人

中川正澄(理 教授)
紫外・可視スペクトル 第2版
S45. 東京化学同人

—基礎工図書室—

尾崎 弘(工 教授)
大学課程電気回路(1),(2)
S45. オーム社
情報回路論(1) (情報工学講座1)
S45. コロナ社

—本館へ寄贈—

工学部一回生(応用化学、石油化学、醗酵工学、原子力工学)
クラム有機化学〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕
S45. 広川書店

図書廃棄手続要領　実施に移す

本館では，利用度の激増により図書の汚損がひどく，また書庫が狭くて図書の保管にも支障を来たしている。これらの問題解決のための突破口として，永年懸案の図書の廃棄について受入掛・運用第一掛を中心に検討してきたが，このたび，問題の比較的少ない汚損図書について次ぎのとおりの廃棄手続要領を定めて早速実施している。

〔説　明〕

① 汚損がひどく廃棄すべき図書を廃棄候補図書として別置し，ブック・カードを摘出する。

② その図書には複本がないかどうか調査する。あれば廃棄。

③ その図書に新刊・増刷があるかどうか調査する。あれば廃棄。

④ 複本もなく，新刊もない図書について，受入・参考・運用第一各掛長が廃棄か保存かについて定期協議する。

⑤ 保存する図書のタイトル・ページおよびブック・カードに「保存印」を押し，修理製本に出す。

⑥ 製本完了後，受入を済ませてから図書は書庫内に納架する。（開架には出さない。）

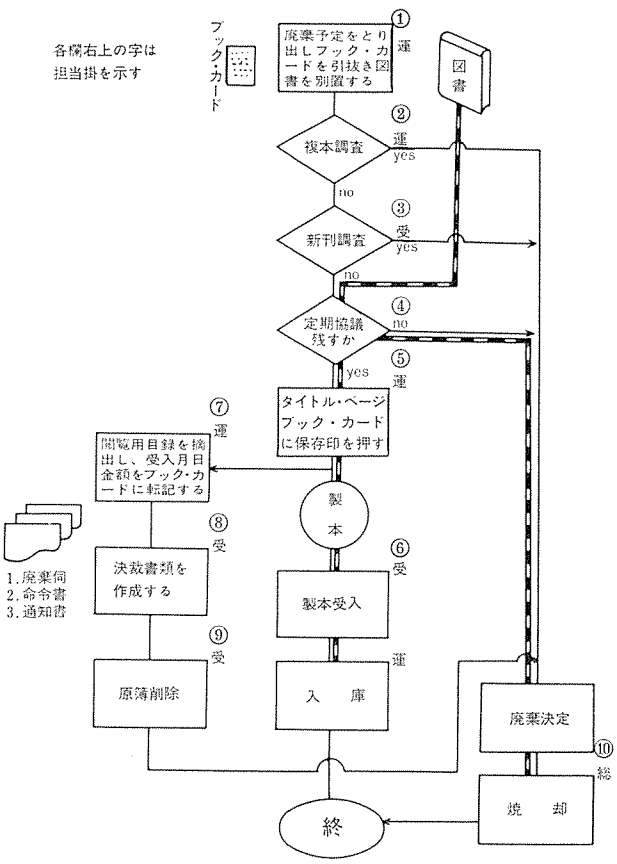
⑦ 先に①で別置したブック・カードにもとづき，事務用・閲覧用目録から当該カードを摘出し，必要記入要項をブック・カードに転記する。

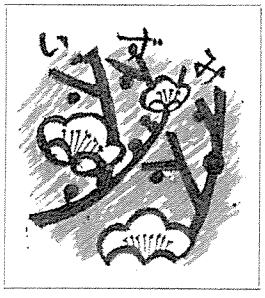
⑧ ブック・カードをリスト化して廃棄伺を作成し，決裁にまわす。

⑨ 決裁終了後，図書原簿から当該図書を抹消する。

⑩ 一切の手続終了後，図書は焼却する。

汚損図書廃棄流れ図





雑　　感　—参考デスクで—

山　本　喜代治

夜間開館を利用されている方ならすでにお気付きのことと思うが，最近，中央図書館1階カウンター横のデスクに，見なれない人間が，むずかしそうな顔で，何やら調べ物をしているの

を見かける。これが，学生諸君からの読書相談や文献調査の依頼に応じるために，この10月から新設された「レファレンス・コーナー」を担当している大学院生である。私は，火曜と木曜の2日，人文社会科学全般にわたる読書相談を担当しているのであるが，今さらながら，自分の教養のなさにあきれると共に，もっと本を読んでおくべきだったと後悔するのである。なにしろ範囲が広いので，そのときになってあわてふためかないようにと，日頃から準備はしているものの，思いもかけないような質問に出くわして面くらうこともしばしばである。そんなときには，2，3日待ってもらって，調査した上で回答するということにしている。今までに私が担当した質問は8つぐらいであるが，中でも一番手こずったのは「天邪鬼について詳しく知りたいので適当な著書を教えてほしい」という依頼であった。このときには文学部の中を馳けづり回ったり，図書館の方にお世話になったりして，てんやわんやであった。その他にも，「児童の安全教育について」であるとか，「日本国憲法成立時における政府と占領軍の関係について」であるとか，「過疎社会，特に廃村の位置と状況について」などの質問が寄せられ，担当者は，そのつど右往左往するのである。しかし，まだまだ，このコーナーを利用する学生は少なく，こういうコーナーがあるということを全く知らない学生も多いのではあるまいか。一日も早く，このコーナーが，真に学生の中に融け込み，アカデミックなことだけでなく，もっと身近な問題についても，どしどし相談にきてくれる日が来ることを希望してやまない。

（やまもと・きよじ）

><><事務部の紹介（5）><><
—整理第二掛—（中之島分館）

整理第2掛の事務室は中之島分館にあり，中之島分館内では整理課に属する唯一の掛である。中之島分館は医学部，歯学部，両附属病院，蛋白研等中之島地区の教職員，学生に奉仕する生物医学系の複合分館である。利用者も研究者が圧到的に多く，学生の占める比率が低いのが特色である。したがって図書館サービスも勢い研究者中心に傾き，研究図書館の性格が強いといえる。その傾向はあらゆる面に現われている。たとえば蔵書一つをとってみても，そのほとんどが，NDC でいえば49の部門（医学関係）で，さらに雑誌の占める割合がきわめて大きい。その他の特色といえば，資料ないしは学術情報の処理および提供の面でスピードが要求される点である。このことは他の自然科学系の図書館と共通した点であり当然といえば当然といえよう。

このような背景の中で，整理第二掛は資料の受入および整理業務を担当している。職員数は5名で，そのうち，女性1名である。近年，図書館職員の女性の占める割合が他と比して圧倒的に多い中で，男性王国を誇る唯一の掛でもある。受入，整理で扱う資料は，年間，単行書約2,000冊，逐次刊行物約3,500冊，現行受入雑誌数約2,200種。以上が当掛の業務遂行にかかわる基本的な数字である。次に個々の業務について若干触れてみよう。

雑誌の受入：受入雑誌の選択のための資料の作成から，閲覧室への新着雑誌の配架までの業務の処理を行なっている。当館では逐次刊行物の占める比重が大きいと述べた。これらの雑誌の欠号補充も当然重要な要素になる。そのためにも最も経済的な重複資料の国際交換の組織に加入して，年間少なからずの資料の補充に役立てている。上記受入雑誌の中には JICST からの寄託雑誌約330種が含まれており，主に西欧諸国で発行された医学に関連する特殊な雑誌をカバーしている。原則的に教室校費による教室任意の購入は，図書館の運営方針ではある程度制限されており，雑誌の管理は図書館に大巾に集中されている。

製本業務：雑誌はおおむね最終号の到着後約1年で製本されるが，この時期では利用はまだ大

巾に減少していない。したがってスピードと正確さが要求される。製本中の雑誌名，返却期日は，常に利用者に明示し，他部局との重複雑誌については製本期日を調整している。

コンテンツサービス：約20年の歴史があり，以前は当館だけで行なっていたが，10年ほど以前から近隣の医学図書館（大阪地区医学図書館協議会加盟館）の共同作業の形をとり，約340種の雑誌について目次速報の原稿作成および編集を担当し，週刊で発行している。その内容において商業ベースで刊行されている「Current Contents—Life Sciences」と異なり，ヨーロッパ関係および臨床関係の雑誌もある程度カバーするとともに，スピードにおいても「Current Contents」に大きく劣ることはない。さらに収録誌の所蔵館名を表示して，必要ならば，なんらかの形で利用出来るよう考慮されている。

単行書の整理：およそ図書館業務の中で現在のところ，この方面で図書館間の差がない業務はあるまい。集中化，標準化による省力化が最も可能な業務であるともいえる。したがって，当館が採用している分類表は，NDCをそのまま採用することは困難で，NLMのClassificationを参照し，修正，展開して使用している点だけで留めたい。

会　議

——図書館委員会——

45.12.15(火) 14.00～17.00　於　吹田分館会議室

①教育改革に関連した指定図書制度の実施　図書館が大阪大学の教育改革に，積極的に参加するためには，図書館の利用が必要であり，そのためには指定図書制度の充実がのぞまれる。最近本館，分館共，予算面，スペース面とも指定図書制度を実施するに充分な態勢にあり，とくにこの実施については，講義を担当される教官，図書館委員の協力が必要であるので，今後は指定図書制度に関する小委員会を発足させて，まえ向きにこの問題を検討することになった。報告事項　①吹田分館の発足　②新しい大学図書館像特別委員会　③国大協図書館特別委員会の「第一次報告」④第17回国立大学図書館協議会総会　⑤本館の夜間開館の実状について　⑥第2次コンピューター講座の開講

——教養図書選択委員会——第2回（昭和45年度）——

45.11.25(水) 2：00～4：00　於　本館会議室

①予算残1,186千円を2分し，今回は約700千円，次回（1月27日）は約500千円選択予定
②法学部教官推せん図書181千円，学生希望図書59千円，図書館推せん図書315千円を選択
③前回から継続の洋書については，Que sais-je および Everyman's Library を5か年計画で揃えることになり，今年度は170千円で次ぎのパートを選択
Que sais-je : Philosophie, Sociologie, Religions-Mythes, Everyman's Library : Esseys and Criticism, Greek and Latin Classics, History.

——工学部図書委員会——

45.12.9(水) 13.00～15.00　於　吹田分館会議室

（報告）①学生用一般図書の選定について　今年度分として総冊数318冊，金額約300千円が図書選定小委員会で決定された。（議事）①吹田地区運営委員1名の選考について　安藤委員の吹田分館長就任に伴う委員の補充選考については，工学部教授会に一任することが決定した。②部内校費の複写料金について　工学部内学科間の電子式複写料金は1枚あたり25円と決定し

た。③工学部創立40周年記念拡充計画について　図書館として次ぎの諸点についての充実をこの計画の中に組み入れることを要求することになった。a 学生用一般図書　b 参考図書類　c 視聴覚ホール機械装置類　d 複写印刷その他装置類（合計 33,000千円）④図書館に備えるべき雑誌類について　従来この点の原則がはっきりしていなかったので，この際次ぎの点を明確にした。a 共通的な索引抄録類　b 工学に共通する研究雑誌　c 各分野の学生向きのもの。これらの原則に従って，12月中に各学科からそれぞれの分野に応じた購入希望の雑誌名を申し出ることになった。

——中之島分館運営委員会——第37回——

45.12.9(水) 16.00～17.30　於　中之島分館

①昭和45年度中之島分館の維持費使用状況　年度途中であるが総額において収支均衡見込みである。②第41回日本医学図書館協会総会（45.10.6～8於横浜）分館長坂本教授が協会長に再選された。なお任期は2年。③指定図書　本年度購入費として 751 千円の配分があつたので，中之島地区の指定図書委員会を開き，本年度当該図書調査のうち中図未所蔵の図書を優先購入し，なお不足分は医，歯の学生用図書費から補填することに決定。④ゼロツクスの複写経費について昨年同様分館長に一任と決定。⑤テレツクス使用内規について相互貸借業務運営上必要のため内規案を上程，審議の結果承認された。⑥年末年始の休館　書庫内の整備及び図書の点検等のため12月25日から翌年1月5日までとすることに決定。

日　程

12月1日（月）　近畿地区国公立大学図書館協議会　新聞分担保存懇談会（阪大）
12月7日（月）　〃　参考図書に関する委員会（府大）
12月8日（火）　大学図書館国際連絡委員会第3回（学士会館分館）
12月9日（水）　近畿地区国公立大学図書館協議会　参考業務に関する委員会（京都府大短大）
12月15日（火）　図書館委員会（吹田分館）

人　事

来　訪　者

11月28日（土）　菅野祐治　文部省情報図書館課長補佐

職員の異動

採　用　馬頭美江子（11月16日付　整理第一掛）
退　職　大村　朋子（12月31日付）

編集スタッフ　編集兼発行人　中野六郎　委員　田保橋彬(長)　岩井　勇　松浦　正　榎田順治　津田恭司　山下　進　泉　文雄
レポーター　徳村泰弘　田中久文　町井照子　近藤敬子　篠田恭子　河崎戎三

大阪大学図書館報　Vol.5 No.1 通巻20号　昭和46年2月1日（隔月刊）　編集発行人　中野六郎
発行所　大阪大学附属図書館　豊中市待兼山町1の1（〒560）　☎豊中 068（56）1151　内線2126